

令和5年9月22日(金)

高島市教育委員会事務局文化財課

【調査地】 滋賀県高島市新旭町安井川字南畑 1573 番ほか

【調査範囲】 南畑3号墳：約60㎡ 南畑1号墳：約100㎡ 南畑2号墳：約160㎡

【調査期間】 令和5年9月1日～令和5年10月13日(予定)

【はじめに】

南畑古墳群は、新旭町太陽光発電所建設工事に伴い平成29～30年(2017～2018)度に発掘調査を実施しました。この調査では、未知の横穴式石室をはじめとする3基の古墳(南畑1号墳・南畑2号墳・南畑3号墳)が発見されるなど大きな成果がありました。そのため、工事の計画変更により3基の古墳は保存されるに至りました。しかし、調査途中での計画変更となったため、古墳の構築方法や埋葬施設の構造など未解明のままのこし、さらなる実態などが課題となっていました。

このことから高島市教育委員会は、平成30年(2018)度より域学連携として、京都橋大学(文学部 歴史遺産学科)と協力し、高島地域の文化財保護と古代史解明による地域の魅力創生に取り組んできました。この発掘調査は、その連携に基づくものです。

調査は、令和3(2021)年度に南畑1号墳、令和4(2022)年度に南畑2号墳、そして今年度南畑3号墳の発掘調査を実施し、新たに以下の調査成果が確認されました。

【発掘調査の概要】

南畑古墳群は、高島市のほぼ中央に位置する饗庭野台地東端部から安曇川に向かって舌状に延びる丘陵地上に位置しています。古墳群は、標高約120メートルのところに位置し、琵琶湖と東流する安曇川を眺め、高島市南部の平野を一望できる立地にあります(図1)。

南畑古墳群は、6世紀を中心に築造された古墳群で、小規模な古墳が群在して構成される「群集墳(ぐんしゅうふん)」と呼ばれるものです。平成30年度に行われた発掘調査により、6世紀中葉に築造された南畑1号墳、6世紀後葉の南畑2号墳、6世紀後葉の南畑3号墳の存在が判明しました。

南畑古墳群からすこし丘陵をのぼれば、5世紀後半から6世紀にかけて築造された下平古墳群があります。現在、遺跡名では違っていますが、本来、南畑古墳群と下平古墳群は、ひとつづきの古墳群であり、南畑・下平古墳群は数十基からなる古墳群であったと考えられます。

安曇川北岸を拠点とした有力者の墓域として、この古墳群が形成されたと考えられ、高島平野の出身である継体大王を支えた勢力を知るうえで貴重な遺産です。

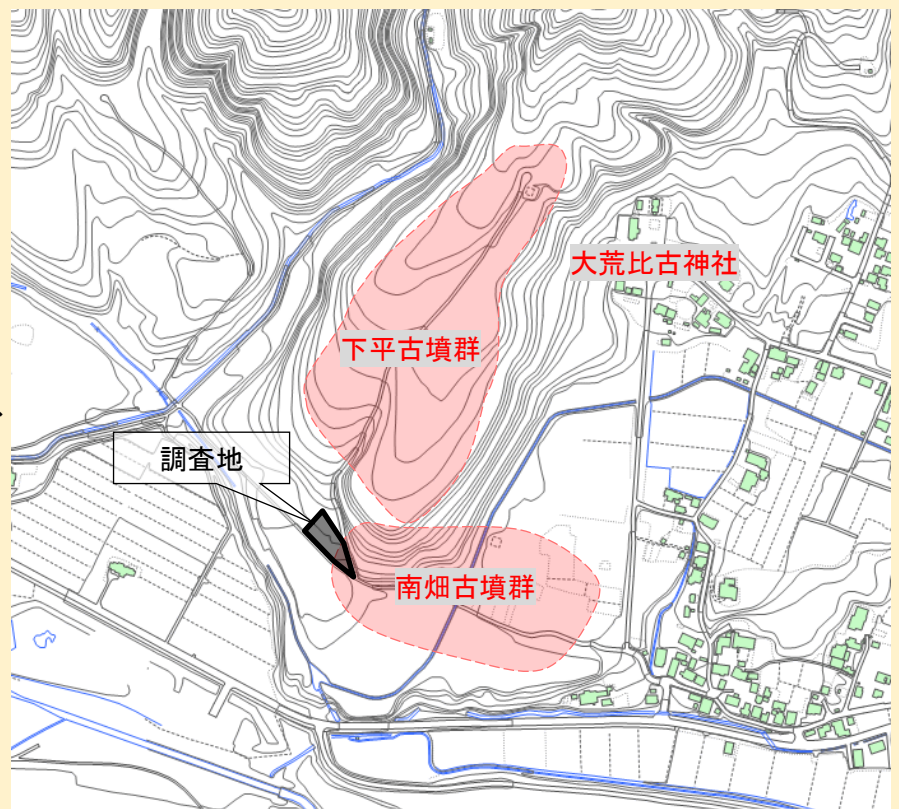


図 調査地位置図

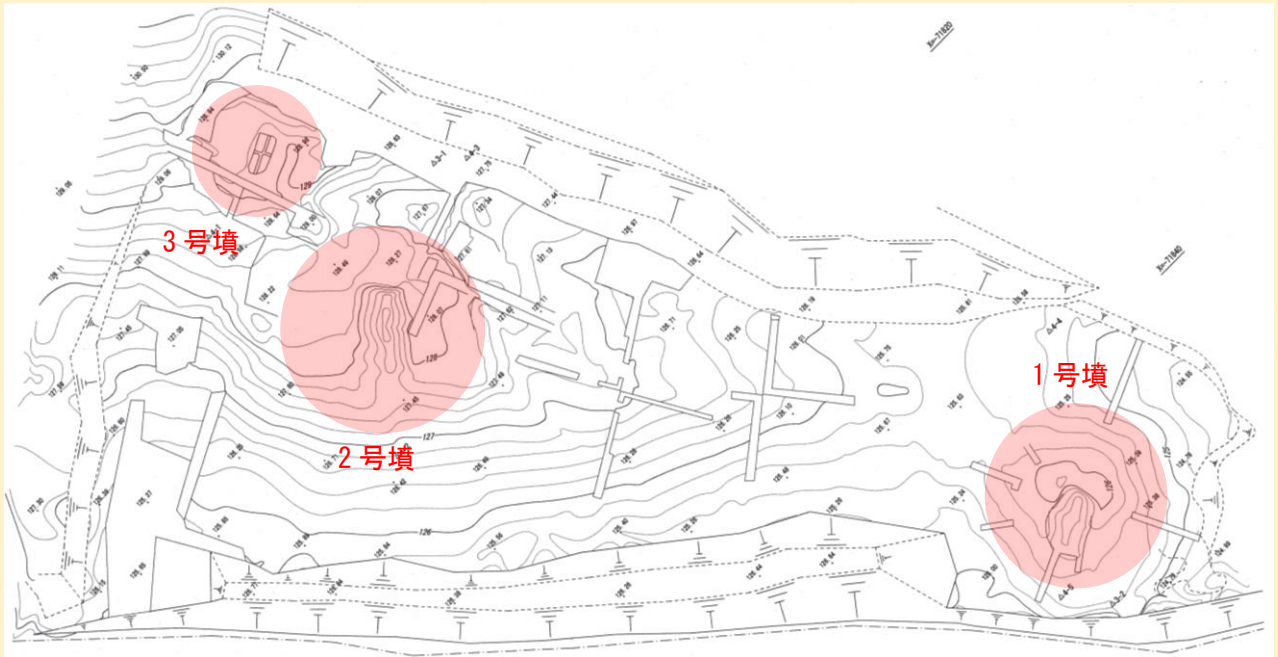


図 南畑古墳群（1～3号墳）位置図

【調査成果 1：各古墳の詳細な墳丘構築方法や埋葬施設構造を解明】

南畑 1号墳：南畑 1号墳は、横穴式石室を埋葬施設とすることは判明していましたが、その築造方法や床面の情報はわかっていませんでした。

2021 年度の発掘調査によって、横穴式石室の床面に小さな円礫を敷き詰めた入念な構造であることが判明しました。横穴式石室を墳丘に先行して構築していくタイプであることもわかり、2号墳との違いが明確になりました。

これまでの調査によって、東アジアで普及した棺に用いた鉄釘や朝鮮半島三国時代（古墳時代にほぼ併行する時代）の古代国家である百済の土器によく似た土器が出土していることから、国際派の被葬者が想定できます。6 世紀中葉の築造です。

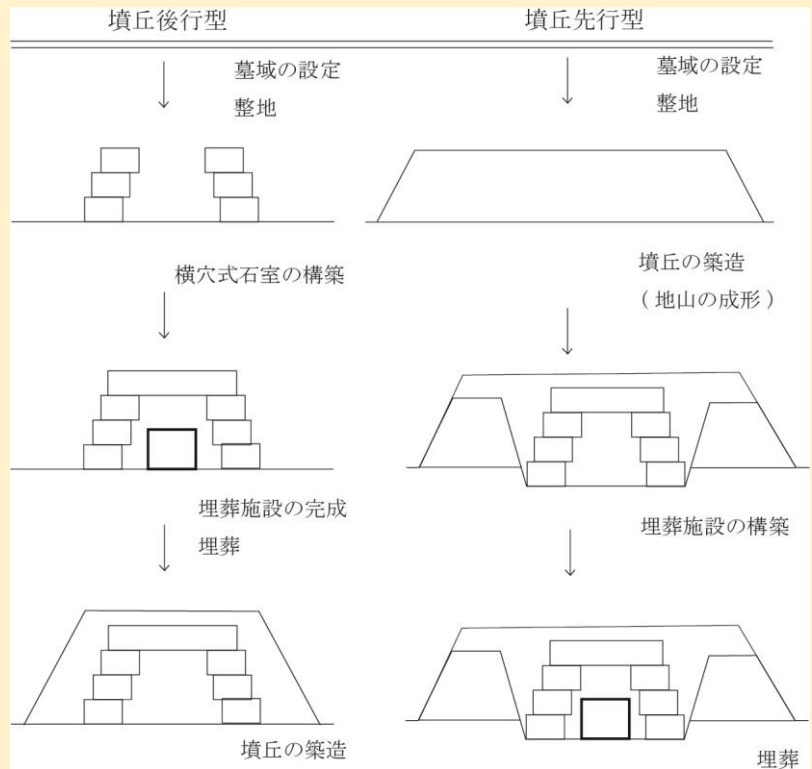


図 墳丘後行型と墳丘先行型の模式図

南畑 2号墳：南畑 2号墳も 2022 年度の調査によって、横穴式石室の床面が礫敷であることを判明しました。また墳丘の調査を行うと、古墳はもともとの地面である地山を成形し、墳丘をある程度つくった後に埋葬施設である横穴式石室を構築した「埋葬施設後行型」の古墳と判明しました。石室は近江地域に特有のタイプであり、1号墳と比較すると、地域重視の被葬者が想定できます。6 世紀後葉の築造です。

南畑 3号墳：6 世紀後葉の木棺直葬と呼ばれる埋葬施設と判明しました。墳丘は 2号墳と同じく、墳丘先行型で 2号墳と周濠を接していることから、密接な関係がうかがえます。木棺内部より須恵器の直口壺と杯身が出土しており、当時の葬送儀礼を良好にのこしています。

【調査成果2：先端的な調査技術導入による文化遺産の記録】

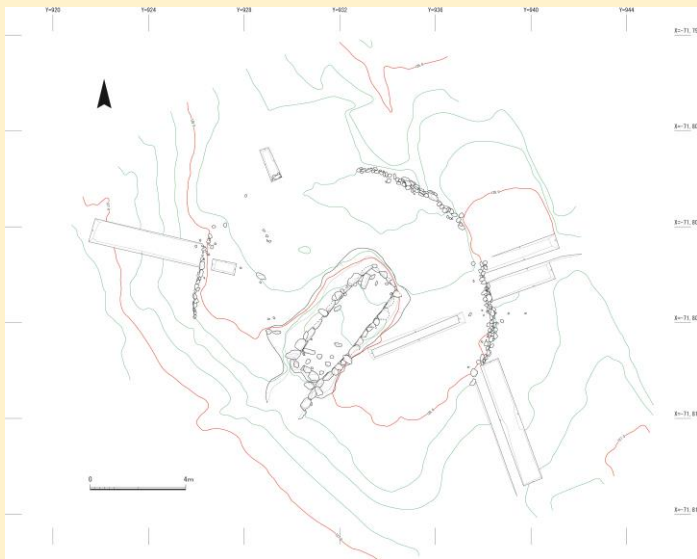
地域の文化遺産について詳細な情報を有し、長年の文化財保護に実績ある自治体の文化財部局と、最新の調査技術や研究動向を追求する大学が連携することは、以下のように大きなメリットがあります。

- ・横穴式石室の三次元計測によって、現時点における横穴式石室の詳細な形状を記録することができます。
 - 横穴式石室のサイズ、構築過程などが古墳研究にとって重要であるので、学術情報として活用できるだけでなく、大規模地震や土砂災害などによって古墳の形状が変化した場合、復旧に役立てることができます。
 - 遺跡調査は、発掘が終わると埋め戻すこととなりますが、デジタル画像として、調査時の様子をいつでもみることができます。
 - 今回、調査に参加した学生には、今後、地域の文化財を守り、伝える仕事に就くことを希望している学生がいます。先端技術を学ぶことにより、将来、文化財の保全と活用の方策をたてることができます。



(写真：上) ドローンを用いて、南畑古墳群上空から琵琶湖を撮影。地域の景観のなかで、古墳の立地を検討。

(写真：右) 1号墳横穴式石室の3次元写真測量。学生作成。正確なサイズとともに横穴式石室を記録。



(図面：上) レーザー機器を用いて、2号墳墳丘の形状を把握。直径12.6mの円墳であることを把握。

(写真：右) 学生が作成した3号墳の3次元写真測量。これまでの調査では得ることができなかった色情報を含めた墳丘の詳細をデジタルで記録。





調査風景と調査の参加者

【まとめ】

高島平野は、「謎の大王」とも言われる継体大王（450～531年）の故郷として、古代史上有名です。3世紀半ばから7世紀までつづく古墳時代、古墳を築造できる人物は、地域の有力者に限定されています。

地域の古代史を復元するうえで、古墳の調査は欠かせません。たとえ、文字による記録が残っていなくとも、地域に有力者が存在し、その実力や政治的な派閥などを、古墳は物語ってくれます。そして、古墳時代を通じて、絶え間なく古墳を築造し続ける地域はほぼありません。古墳時代は、中央や地域の勢力が栄枯盛衰を繰り返す激動の時代であったわけです。

今回の調査成果により、1) 南畑古墳群では6世紀中葉より累代的な古墳築造を行っていること、2) 個々の古墳が同一の墓域でありながらも、石室の有無やその構築方法が異なるなどといった点が明らかになりました。こうした成果は、継体大王の没後も大王を支援してきた地元高島の勢力が維持され、古墳築造を続けていたことを示す重要な調査成果です。また、通例では木棺直葬は6世紀前半までで、後半には横穴式石室へ移行される事例が多い中、木棺直葬を採用した6世紀後葉の円墳である3号墳は近畿では珍しい事例です。

今後、今回得ることができた調査成果を考古学、日本古代史の中で位置づけていきたいと思えます。

【調査協力】中久保辰夫（京都橘大学）

【参加者】高島 悠希, 益 彰吾, 北村 望実, 籠尾 拓幸, 西 悠太郎, 飯室 遥, 中畑 博貴, 吉田 宗一郎, 宮内 聖花, 今西 もも, 上原 弦登, 小川 幸哉, 大関 真央, 奥山 乃里実, 勝元 希美, 川島 怜香, 北口 直也, 虎走 実穂, 五味 璃子, 迫 優花, 澤村 拓斗, 新開 智怜, 多田 紅葉, 田中 孝憲, 戸江 花音, 成田 浩一郎, 畠山 友希, 原 こだか, 久田 陸斗, 藤川 琴音, 南園 佑月（京都橘大学）

【編集・発行】高島市教育委員会事務局 教育総務部 文化財課 令和5年9月22日（金）